

80億人の持続可能性

11月15日、「世界人口はこの12年間で10億人増加し80億人を超えた」と国連から発表がありました。人口を支えるために必要なエネルギーが増え続けて地球温暖化対策は待った無しです。主に人口が増えている途上国には「温室効果ガスを抑制せずに開発を進め、温暖化の原因をつくったのは先進国だ」との認識があります。このため地球温暖化の解決を目指す国連条約にも「共通だが差異ある責任」という考え方が採用され、先進国が途上国を支援する仕組みが導入されています。

一方、発展途上国で増え続ける人口は都市部に集中し、スラム街やゴミ問題、環境汚染、交通渋滞などを引き起こしています。しかし人間は環境より生き残るための経済活動を優先させてしまいます。このため、途上国の温室効果ガスの排出量が増え、途上国と先進国とがぎくしゃくして資金供与や技術移転の仕組みが機能せず温暖化対策は足踏みしています。かつて日本でも高度成長期に経済を最優先させ、公害など多くの社会問題が発生しましたが試行錯誤しながら時間をかけて克服してきた歴史があります。このプロセスを学ぶことで、直面する問題解決のスピードを上げる事が出来ます。JICA九州は公害克服で実績を上げた北九州市の取組みに着目し「持続的な都市開発のための都市経営」という研修コースを設けて途上国の職員を受け入れており、私も講師として参加しています。

現在、エジプト、ラオス、モルディブ、スリランカ、ウガンダ、ベトナムの職員が研修中です。各国の職員の悩みは様々ですが、日本では考えられない貧困や劣悪な環境、沈みゆく国土に立ち向かっている研修生の現場を知ると、先進国がもっと真剣に現実を捉えることが必要と再認識します。途上国あつての先進国、持続可能な地球の実現には途上国が直面する様々な問題を解決することが先決です。途上国の見えない現実を知り、80億人は同じ船に乗っていると自覚することが持続可能な地球を取り戻す糸口と感じました。

知覚システムと見解の相違

ある現象の捉え方は人によって違います。組織や国の間でもある事柄について「見解の相違」という言葉を聞くのは日常茶飯事です。心理学によると我々の知覚システムは、まず、ある現象を見たり聞いたりして感じ取った情報を知識のフィルターにかけます。そこで知っていると判断された情報のみが次の価値のフィルターにかけられ肯定的、否定的、中立的なものに分類されて知覚されるそうです。この2つのフィルターはこれまで育ってきた環境や経験によって人それぞれ違います。ロシアのウクライナ侵攻という事象でも世界の国々の見解は程度の差はありますが見事に3つに分かれています。

少し古い本ですが、この捉え方の違いに着目したミステリー小説があります。湊かなえ著「告白」(双葉社)です。登場人物ごとに物語のきっかけとなった事件の捉え方(知覚)が全く異なり、その違いから新たな事件が次々に起こります。ストーリーは関わった人々の告白で構成され、各人の告白から「知覚」の違いが明らかになり全容が解明されます。日本人は同質文化で黙っていても空気が読めると言われますが、人の知覚は全く違うことをこの本は教えてくれます。個々の人間の知覚システムが違うのですから異なる国同士では大きな違いがあるのは当然です。人は異なる「知覚」を持っているという前提に立つと、相手を理解しようとする姿勢が変わります。人種のるつぼと言われるアメリカでは、自分の考えはきちんと主張しないと相手は理解できないという前提で話しますし、理解できないことは納得できるまでしつこく聞いて来ます。失われた30年から抜け出すためにも多様性が求められている日本。知覚システムに違いがある多くの人と対話して刺激しあうことが必要です。どうして自分の言うことが分からないのか「見解の相違」とはねつけず、どうすれば分かり合えるかという姿勢が不確実で正解のない未来社会へのイノベーションを拓くと感じています。